

魔法のオナホで

# エッチな し放題!

089号

挿絵 相川つぎ

試し読み版

序章	セクハラ少年と魔法のオナホ	006
一章	奈央先生で初オナホ！	028
二章	姫香ちゃんのおっぱいオナホ！	055
三章	後輩少女とプールでGO！	089
四章	フェラオナホールとお硬い(?)幼馴染	123
五章	二つ(二人)一緒に魔法のオナホ！	168
六章	ガールズ・オナホ・パーティ！	208

# 登場人物紹介

さいばんじしめが  
**西園寺姫香**

おっとりとした箱入り娘のお嬢様。学内トップクラスの巨乳をいつも隆樹にセクハラされている。

あまはらみそら  
**天原美空**

隆樹の幼馴染で、風紀委員として彼のセクハラに睨みを利かせている。

ななせあきら  
**七瀬聖**

水泳部所属の年生。クールで無口なためか、うきあいが苦手な美少女。

たちばなあかり  
**橘奈央**

隆樹のクラス担任で水泳部の顧問。スタイル抜群の美人だがサバサバとして凛々しい性格。

かきすぎたがき  
**極杉隆樹**

明るく馬鹿で直球スケベな男子学生。自他ともに認めるセクハラ大魔人。



## 一章 奈央先生で初オナホ！

「ねえ隆樹。昨日の朝だけけど、なにをやっていたの？」

翌朝。「普通」に登校した隆樹は、教室で美空に問いかけられた。

「聞いたわよ。空き地で猫に大真面目に話しかけていたって。大丈夫？ ひよつとして殴りすぎちゃった、なんてことはないわよね？」

美空の声は少し不安げだ。席に座っていると、ところを覗きこまれたりした。

「殴りすぎはいつもだろ。っていうか、なんだよ急に？」

「だって、今朝はなにもしないんだもの」

セクハラせずにいることが、よほど異様に映るらしい。こういうときにふと分かるのだが、美空は案外、心配性な一面がある。

「病院に行った方がいいんじゃないかしら。ついて行ってあげてもいいのよ？」

「あのね……まったく、俺だってアンニユイになるときはあんの」

軽く気遣いを見せる彼女を、そう言っってはぐらかす。

実のところ少し考えこんではいた。例の「魔法のオナホ」について、である。

あのときはノリで受け取ったものの、後になって考えてみると疑わしいことこの上ない。

人語を喋る猫と意気投合してオナホを貰った。こんな話を誰が信じるというのだろうか。

だが確かな証拠としてオナホは今、カバンの中にある。と言つても、外見はまさにちくわかう〇い棒で、何も知らずに拾つたとしてもオナホだと思ふ人は皆無だろうが。

(あんなのでシコレっていわれてもなあ。ああでも、女の子見ながら念じればその子のおま〇こ型になるんだっけか。意味分からんけど、もし本当なら気持ちいいかも)

多少の知識はないが実物を手にした経験はない。聞けば本物に似せた内側になっているのだとか。つまりこのオナホは、限りなく本物に近くなるということだろうか。

しかも感覚までその女の子に繋がると言う。もし本当なら、まさに魔法のオナホだろう。無論、隆樹とて魔法など見たことはないし、信じてもない。

しかし本当だったら面白いし、試すくらいの価値はある。

「ま、いっちょやってみっか！」

猫が喋ったくらいだし、深くは考えまいと隆樹は思った。

※

「さて、この化学反応だが……天原、どうなると思う？」

その日の三時限目は、担任の奈央が受け持つ科学の授業だった。

科学室の教壇に立つ美人教師の奈央は、いつものようにワイシャツとタイトスカート、その上に白衣という格好である。

(やっぱ美人だなあ奈央先生。むっちりポイントだし気の強そうなところもポイント高いぜ) 言葉遣いがやや男じみているものの、外見的には色っぽくて大人の雰囲気抜群である。教師としてはまだ新人だが姉貴分な性格であり、生徒にも大人気の魅力的な女性担任だ。堂々とした態度で授業を進める姿は、男子にとつての理想の科学教師に近い。

その奈央で実践してみようと思ったのは、半ば偶然だが期待もあつた。

授業中だが、まあ構わないだろう。本当に使えるという保証もないのだから。いまだ懐疑的ではあるが、机の下でこっそり魔法のオナホを握り、念じてみる。

(奈央先生、奈央先生のおま○こオナホ……!)

思い描くのはネット上でよく見たオナホ。円筒形で非貫通タイプ、内側にヒダとイボのある代物だ。そもそも実物を手にしたことがなく大まかなイメージしかできなかつた。

すると――

(おおおっ!! なんだこれ、どんどん形変わってきて――ま、マジでオナホになつた!)

驚いたことに、手にした物体がたちまちそれらしい形状になつた。少し歪いびつな円筒型の、ピンク色をしたオナニーグッズが確かに出来あがつていた。

(すげー、マジで変化した。念じただけで形変わるとか本物の魔法みたいじゃん!)

ここに至つて、隆樹はようやく高揚感を覚えてきた。

これが本当にオナホなら肉棒を入れる孔あながあるはず。そう思つて底の部分を見てみる。

すると、二度目の驚きが彼を待っていた。

（おおおっ!? ちゃ、ちゃんと、おま○この形してる!）

底の部分に膨らみがあり、その膨らみの中心部分には確かな割れ目の造形があった。大陰唇がぶつくと盛り上がり包皮に包まれた陰核がある、綺麗で大人の色気溢れる女性器の形が再現されていた。

（これが女の子のおま○こなのか。本物じゃないかもしれないけど、すげーいやらしくてそそるなこれ）

玩具おもちゃなはずなのに想像以上に生々しい造形で、白に近い肌色の恥丘もあまりに色っぽく見ていて興奮した。

そして何より驚きなのは、その造形に動きがあったことだ。

「ここも覚えておくように。おい、そこ搔杉、女のことばかり考えてるんじゃないぞ」  
教壇を横切るように奈央が歩いている。それに合わせて割れ目も確かに動いている。

生き物みたいなオナホの動きに、隆樹は啞然とした。

（目当ての子を再現するとかいつてたっけ。ってことは、マジで奈央先生のおま○この形になってるのか?）

確証はないが、先生の歩く動きにぴったり合っているように思える。今現在の状態まで再現していると考えるのが妥当だろう。

これではまるで本物のおま〇こみたいではないか。

いまだに信じられない心地で、隆樹は割れ目に指で触れてみる。

「んっ——こ、こら、なにを——」

奈央は少し驚いた様子で、お尻の辺りを手で払った。

「あ、あれ、誰もいな——んっ、なにが——」

さらにお尻に手を這わせるが、そこには何もなく、奈央は少し困惑している。

「その一方で、隆樹は三度目の驚きを得ていた。

（う、動いた、触ったら動いた！ どうなってるんだ、ほんとに本物みたいだこれ！）

とても無機物とは思えない反応が触れた指に返ってくる。感触も柔らかく、ほんの少し湿り気があって、温めてもいないのに人肌に近い温かさまであった。

しかも割れ目はかすかにヒクつき、思いがけないタッチに怯おびえている風に見える。

「なにか、触れたような気がしたんだが……気のせいか、じゃあ続きを……んんっ……！」

割れ目に指先を這わせてみると、奈央はまたお尻を触って小さく震えた。

「なん、だ、また触られてる感じが——んんっ、入り口のそこ、そつとお……」

大陰唇をそつとなぞると、離れた場所にいるはずの奈央が少し恥ずかしげに腰を動かす。

「はあ……なんなんだ、誰も触ってないのに、こんな……んんっ！ そ、そこはあ……」

今度は割れ目を小さく開き、小陰唇にも触れてみる。奈央は声を噛み殺しつつも小さく



肩を震わせる。

同時に割れ目がヒュクツと動き、中からうつつすらと蜜が湧いてくる。

隆樹はそれを指で感じ取り、思わず喉をゴクリと鳴らした。

（ぬ、濡れてきた。オナホが愛液出し始めたぞ！ それに奈央先生のあの様子、これってマジで感覚繋がってる!!）

そうとしか思えない状況だった。本物っぽい見た目のオナホ、本物っぽい反応のラビア、担任教師の不可解な仕草、すべてが黒猫ダニエルの説明に当てはまっていた。

つまりこのオナホは今、まさに奈央のおま○こそのものと言える状態なのだ。

隆樹はようやく信じる気になり、机に隠してラビアをくぱと開いてみせる。

「んんんっ!! ひ、開い、てえ……ッ！」

この感覚も伝わっているらしく、奈央は戸惑いの声を漏らす。

普段サバサバした担任の思いがけないか弱げな反応に、隆樹はだんだん燃えてくる。

「はあ……はあ……んんっ、そんな……くあッ、動いてえ……ッ！」

小陰唇をもぱつくり開くと膣前庭があらわになった。淡い朱色の粘膜と、尿道、膣口が露出する。隠れてそつと鼻を寄せると、ほんのり甘酸っぱいエッチな香りが鼻腔を突いた。

「はああ……息、かかっている……そんなはずがない、一体なにが……んあッ！」

鼻を寄せたまま今度は膣口に指先を進める。薄く湿った小さな孔を軽く解して刺激する

と、大陰唇と小陰唇がヒクヒクと細かく蠢きだした。

(すげー、まだまだマン汁出てきてる。クリちゃんもしつかり皮剥けてきて……エロい、マジエロいぞこのオナホ！)

お世辞にも慣れた手つきではないが、やはり触られると感じるらしい。膣口付近は着実に濡れて、キラキラと光を反射し始める。

おかげで指も入れやすくなり、中指をつぶつと侵入させると、  
「んあぁッ——は、入って、くるう……ッ!!」

授業中であるにもかかわらず奈央は悩ましげに腰をくねらせた。

「先生、どうしたんですか？ さつきから様子が変ですけれど」  
美空が異変を察して声をかけた。

「な、なんでもない。少々腰の辺りが痒い程度だ……」  
奈央はすぐに取り繕い、少し屈んだ背筋を直す。

「では、つ、次の化学式についてだ。天原、やってみる」  
いつもの調子を演じてはいるが、感じているのは間違いないようで頬が薄く赤らんでい

る。心なしか瞳も潤んで、色気がぐっと増して見えた。  
(さすが奈央先生、みんなの前だから我慢してるっぽい。くう、そういうの燃えるな俺！)

悪戯心とセクハラ精神が同時に強く刺激を受けて、このまま続行を訴えてくる。

隆樹は膣口に入れた中指を、軽く動かし円を描く。

「んあッ——くう、動いて……こすれる、はあ……ッ！」

中の粘膜は敏感らしく、こすつてやるとすぐにきゆうつと締めつけてきた。思った以上に中は狭く、柔らかいヒダヒダがぴったりと指に張りついてくる。

その凹凸ごと粘膜を擦ると、奥からとぶつと愛蜜が出てきて指全体をくまなく濡らした。「はあ、はあ、くう……指、なのか……曲がつて、引つかいてくるう……！」

奈央は懸命に授業を続けるが、見るからに頬が火照り始めて汗の珠まで浮いてくる。教卓に置いた両腕は、ピンと伸びた背筋を支えて細かく震え始めていた。

「先生、大丈夫ですか？　なんだかとてもお辛そうに見えるんですけど……！」

「だ、大丈夫だ西園寺、少し熱っぽい程度で後で休めば……んあッ、あああッ……！」  
——ぬちゅつ、くちよつ。

どんどん濡れてくる魔法のオナホに隆樹の中指が半ばまで入った。じつとりと湿った熱い媚肉がより深くまでまさぐられる。

途端に奈央は腰をうねらせ白衣の肩を小刻みに痙攣させた。

「はあ、はあ、お、奥まできて……どうなつて、本当に、お、おまん……くう……！」  
いよいよ快感が腰に来るのか彼女は小さく尻を揺すった。タイトスカートに包まれたヒップが悩ましげに動いて白衣をも揺する。汗の浮いた凜とした美顔は、ついに切なげな表

情を浮かべ、熱っぽい吐息を漏らし始めた。

（すげー、奈央先生マジで感じてるっぽい。オナホもひくひく蠢いてるし、奥なんてもうびしょ濡れだぞ）

どういう原理かは分からないが、実物同様に愛蜜は滾々と湧き続けている。粘膜はさらに熱をあげてヒダヒダで指を締めあげてくるし、あらわになった淫唇は呼吸するように収縮を繰り返している。まるで指を唾えこんで唾液を出してしゃぶっているみたいだ。

そのねっとりとした不思議な感触は指で味わうだけでも心地よい。さすがにペニスを取り出せないが股間も興奮でエレクトロしていた。

奈央先生のエッチな姿を、もつともつと見てみたい。

セクハラ大好きなエロ少年は、そう思っただけでも指を動かす。

「んあッ、んんんんッ!？」

教科書を読みながら歩いてきた奈央は、一際声を高くして豊満な肢体をくねらせた。

「んあッ、こ、ここはテストに出るかもし……はあ、こすって、中ずばずばおッ……!」

徐々に慣れてきた指の動きが次第にリズムを速めていった。軽く曲がつてヒダをこすりピストン運動で中をかき混ぜる。次々と湧いてくる愛蜜が絡んで透明な糸まで引き始めた。

「いいか、次の授業でこの実験をやるから覚えて……んああッ、もうよせえ……ッ!」

教科書を読んでいるかに見えるが、その瞳は潤みきって絶対に文字など見えていない。



化学

chemistry



スポーティで細身ながらも女性らしいカーブを描く、それが聖のボディラインだ。ショートボブも活動的で、濡れた質感が妙に艶かしく見える。

「な、舐めるように見ないでください、もう始めますよっ」

そう言っただけで後輩と一緒にプールに入った。個人的に付き合ってくれるつもりらしい。隆樹の目的は当然セクハラ。だが泳いでみるのも悪くないと、まずは素直に従う。

「……びつくりしました。先輩って、そこそこできるんだ」

端まで行っただけでターンして戻ると、意外そうな聖の称賛が待っていた。

「フォームも綺麗だし速いです。10メートルも泳げないんじゃないかと思ってたのに」

「小学生かよ俺は」

「ええ。この歳でスカート捲りする人ですから」

そう言っただけで聖は目を細めてくすくすと笑った。

「これなら一緒に泳いでも大丈夫そうですね。隣のレーンが空いてるから平行して泳ぎましょうか」

ちゃんと泳げるのが好印象だったらしく、物静かな表情に楽しそうな色が浮かぶ。

もちろん断る理由などなく二人揃って一緒に泳ぎます。

しかし隆樹は隣のレーンではなく、聖と同じレーンを少し後ろからついていった。

(よし、聖と一緒に泳げるぞ。さてさて——うん、いいね！ 後ろからだとお尻見える！)

クロールではこちらがついてこれないと思つたのだろう。聖は平泳ぎで泳いでいた。おかげで脚とお尻の動きが後ろからよく見えた。大きく太腿を左右に開いて水を蹴って泳いでいるため、お尻のお肉がよく動いてクロッチの食いこみまでばっちり拝めた。

この水中の女体を観察するのが本ミッションの肝である。真下から見た彼女のヒップは綺麗な二つの山を作って、ぷりぷりと弾むように動いていた。

(やっぱいい尻してるな聖は、割れ目に顔を埋めたくなるぜ)  
やれば当然怒られるので今は目だけで楽しむ隆樹。

が、ふと思いついて、パンツの中に隠し持ってきた魔法のオナホを手を取った。

これはチャンスだ。普通のセクハラは一通りやつたし、今は聖がすぐ近くにいます。こっそり持ってきた甲斐があるというものではなからうか。

(あんまり怒ったり騒いだりしないけど聖ってどんな反応するんだろ？ 興味あるなあ)  
普段から口数が少なく、あまり感情を顔に出さないが、より大胆なセクハラをされるとどうなるのか見てみたい。

幸い水中なら他人の目を気にすることなく、近くで存分に見ることができると。  
隆樹は早速、魔法のオナホを握って念じた。

(むむむ、聖のおま○こ、聖のおま○こ——よしできた、聖のおま○こオナホ!)  
これまでと同じ手順で変形し、非貫通型の魔法のオナホが完成した。



どんな形なのかと思ひ、泳ぎながら覗きこんでみる。

(これが聖の……おおお、これまた綺麗なおま○こだなあ、狭くてすごくキツそうだぞ)  
薄い亀裂が入ったような初々しい見た目のラビアだった。小陰唇どころか大陰唇までとても小ぶりで、まるで薄いピンク色の華のつぼみみたいだった。

その薄くて綺麗なオナホの亀裂が、本物の動きを忠実に再現し、泳ぎにあわせて小さく開いたり閉じたりしている。

何もしなくても蠢いているなんて、なんていやらしくてすごいんだろう。

隆樹は改めて感動し、そつと割れ目に指を這わせた。

「ぷはっ?! やっ、ちょ——」

聖は水面から顔を出すと、泳ぎを止めて、びっくりした様子で背後を見やった。

「ん? どうした聖、急に止まって」

「い、いえ、なんでも……ありません」

戸惑ったような恥じらっているような、何とも言えない表情を浮かべ、聖は自分のお尻に手で触れる。

「その……触りません、でした?」

「え、お尻を? まさか、そんなことしたら先に脚に蹴られちゃうし」

言われた聖は頬を薄く染め口籠る。隆樹の言うように陰部に直接触れようとすれば、そ

の前に蹴り脚に当たってしまった。

それでも釈然としないのか、聖はクールな顔立ちに若干胡乱なものを浮かべる。

「……なんでアタシの後ろなんです？ 隣のレーンだったのに」

「体験入部だもん、教えてもらうか見て学ばないとね」

「また適当なこと……分かりました。でも、触ったりしないでくださいね」

しっかりと念を押してから、聖は平泳ぎを再開した。

隆樹も素知らぬ顔で後から続き、再びオナホに軽く指を這わせていく。

「ぶはっ！ ちょ、また——え、そんな……？」

再度聖は顔を出して振り返るも、当然ながら何も異常は見つけられない。

気のせいとも思ったのか。彼女は首を傾げ、もう一度平泳ぎを再開して——しかし。

「ひゃ、く、くすぐった……やだ、んう……」

その後も何度か背後を振り返り、彼女は次第に困惑の色を浮かべていく。そこには誰もいないはず、それなのに陰部を触られる感じがして驚いている。

少し後からついていく隆樹には、彼女の心境が手に取るように分かった。

（困ってる困ってる。泳いでる最中におま○こ触られるなんて思わないもんな普通）

普段の言動からこちらを怪しんでいるに違いないが、状況からしてそれができるとも考えにくい。だから不思議がつている。恥ずかしがって、戸惑っている。

あまり感情を表さない聖の困惑の表情は珍しく、こっそり窺う側としては新鮮な気分を味わえる。

「なんでこんな……ひゃ、また……んう……」

疑似おま○この薄い亀裂を指先ですりすりと擦りあげていくと、水に濡れているおかげなのか、みるみる柔らかく解れてくる。

同時に聖の腰が微震え、徐々にフォームが乱れてくる。

「なんで、な、なぜられ……いやつ、ひ、開い、てえ……?」

恥丘が柔らかくなってきたところで今度は裂け目を少し開く。閉じあわさっていた小陰唇が水の中でヒクツと動く。

続いて内側の桃色粘膜を軽くこすって刺激してやると、びっくりしたように裂け目がまたきゅーつと閉じあわさった。

「いや、いやッ——そんなとこまでえ……!」

聖は刺激から逃れようと、泳ぎをやめぬまま後ろ手にお尻に触れた。けれど無理だ。実際に触られているのは、感覚を共有した魔法のオナホなのだから。

（うんうん、聖も感じるんだな。あんまり縁がなさそうだけど身体はぱっちり女の子だ）

部活動に精を出す子を邪魔するのは気が引けなくもないが、若い綺麗な女の子に触れて回るのはやっぱり楽しい。

それに聖にも、部活以外の楽しさ、主にエッチな気分を味わってもらいたかった。

（人付き合いもあんまり得意じゃないらしいし、俺がもつと構ってやらなきゃな。つていうか、もつといろいろできないかなこれ）

通常型のオナホもいいが、これにはもつと可能性がある。姫香のときみたいに様々な使い方があるに違いない。

ややあつて一計を案じた隆樹は、今一度オナホを握って念じた。

（むむむむむ—— おお、できた！ 女性型ハンドオナホール！）

通常型だった魔法のオナホが、それとは別の新たな形に変わっていた。

女性型ハンドオナホール、それは普通のオナホに一手間加え、外側までも女性の裸を模倣したものである。

ラブドールに少し近いが、こちらは大きさがオナホサイズで頭や手足はつけられていない。使い方も基本は一緒。しかしながらおっぱいやお腹、お尻も造形されているだけに、本物の女体により近いイメージがあった。

そのモデルが聖ということは、このオナホは、彼女の身体を再現したということ。

そして驚いたのは、何と水着まで再現されていたことだ。

（すげー、これじゃマジでミニマムサイズの聖じゃん！）

胴体のみだが確かに彼女の身体を彷彿ほうふつとさせる形状だった。掌サイズと思おぼしき小ぶりで

可愛らしいおっぱい、体育会系らしいしゅつとしたくびれ、意外にふつくらとした桃のよ  
うな美麗なヒップ、それらを覆うポリエステルのハイレグ水着、どれも再現度が高く本物  
を手にする気分を味わえた。

もちろん泳ぎの動作まで、きちんと再現されている。溜めや水中キックにあわせて背筋  
が伸びたりたわんだりし、ハイレグのクロッチ部分が緩んだり食いこんだりしていた。

(おま〇こは見えなくなっただけど、これはこれでエロいなあ。うわ、クロッチのシワまで  
ちゃんとあるし、おま〇この筋が浮き出ちゃいそうだぞ)

まるで小さな生きたラブドールだと、隆樹はつくづく感心した。

ともあれ鑑賞しているだけではセクハラ大魔神の名が廢る。

隆樹はまず、小さな人形の小ぶりなおっぱいに指を這わせた。

「ごふっ!? はあはあ、こ、今度は胸——んう、水着の上、からあ……」

水を飲んだのか、聖はまた止まって咳き込み、両手で抱く形で胸を押さえた。

「なんで、さつきから身体、触られてるみたい……いや、ち、乳首、までえ……」

掌サイズの人形なため揉みしだくことは不可能だ。なので指先でくりくりと撫で回し、  
可愛いおっぱいの先端部分を緩めに引っかけて刺激する。

その感覚が聖の身体を確実に変化させていった。

「いや、触らない、でえ……アタシ、恥ずか、しいっ……」

「どうしたんだ？ そんなに泳いでないのに息荒いぞ」

この異様な事態に、聖はつきりと顔を赤らめていた。

「い、いえ、なにも……先輩、あの、ほんとに触ったりしてない、ですよね……？」

「もちろんさ、指一本触れてないって！」

自信満々に隆樹は言ったが、聖にはね、と心の中だけでこっそり付け足す。

「でも、アタシさつきから、む、胸とか……んふうッ……？」

後輩は眉をハの字にして、恥ずかしげに目を伏せて震えた。白い指先がおずおずと伸び、胸の膨らみにそつと触れる。

「ち、乳首、引つ張つてえ……いや、しごく、のお……」

水中にある薄い膨らみが、その先端を尖らせていた。勃起したのではなく軽く摘まれてこすられているのだ。

無論、隆樹の仕業である。人型オナホの乳首を摘んで指で優しくごいているのだ。

「はあ……先輩、アタシなんだか……身体、が……」

「んー、なんか顔赤いぞ？ ひよつとして……エッチな気分になってきたりして？」

からかうように隆樹が言うのと、聖は少しムキになって言い返してきた。

「ち、違います！ 泳いでいるのにそんな……こ、今度は少し飛ばしますから、ちゃんとしてきてくださいねっ」

羞恥心を紛らわすかのように、聖はやや乱暴に泳ぎだす。

言ったとおり少し速度があがっていた。隆樹の腕ではついていくのがやっとのレベルだ。しかし彼は慌てることなくニンマリとして、次はオナホの水着のクロッチに指をかけた。「ひゃっ、いやッ!! あ、アソコ、水着いッ……?」

後輩はすぐさま速度を落とし、慌てて両手で陰部に触れた。

水中で見ても分かるくらい、水着のクロッチが陰部に食いこんでしまっていた。お尻の側が引つ張られたため、自然とそうなってしまったのだ。

（おおっ、際どい食いこみゲート! 聖びつくりしてる、まっ赤になって超可愛いっ!）  
これも十分刺激になるらしく丸い桃尻がびくびくしていた。両手が必死に隠そうとするも、かすかに漏れ出た恥丘のお肉まで小さくわなないてしまっていた。

それらの反応は、彼女を模した人型オナホに如実に現れている。細く布が食いこむ恥丘は今にも粘膜が露出しそうで、ヒクつく薄い縦の線が布にきゅつと浮かびあがっていた。

「いや、水着があ……引つ張らないで、食いこむ、こすれッ……み、見えちゃうッ……!」  
おまけに上に引つ張ったせいで、お尻の割れ目まで半ば露出してしまっていた。魔法のオナホはアナルまでしつかり再現しており、手にする隆樹には小さなシワが震えているのも丸分りだった。

「ぷはっ、はあっ、だめ、先輩に見えちゃうッ……お願い、これ以上、はああ……!」

必死に水着を直そうとするも、そんな聖に意地悪するようにクロツチはますます陰部に密着する。だんだん布が細くなってきてラビアにきゅきゅつと鋭くこすれ、耳に届く聖の声が次第に悩ましさを帯びてくる。

(見えるぞ、俺にも聖のマン筋が見える！　つていうか頑張るなあ、あんなに感じてるの  
にまだ泳いでるよ)

この状況下でさえ聖はまだ平泳ぎを続けていた。脚で懸命に水を蹴るも、おかげで余計に布が食いこんでしまっている。何とか掌で隠そうとするが、すでに可愛いピンクの筋がわずかに顔を覗かせている。

後ろから追いかける形の隆樹は彼女のお尻を見放題だ。感じているに違いない聖はペー  
スが明らかに落ちており、容易に近づいてじつくりと反応を目で楽しめた。

「はあ、はあ、こすれるう、もう腰い……力、抜けちゃううッ……！」

見ると腰まで左右に動いてお尻を振ってしまっていた。感じながらも泳ぐ姿が嗜虐心しぎやくしんをも強く刺激して、隆樹はなおのこと菌止めが効かなくなってきた。

「水着、はあ、はあ、アソコに、食いこんッ……あぁッ、そんなところもおッ……!!」

肉棒に熱を集めながら今度はオナホのお尻を触る。食いこみで溢れたぷりぷりの尻肉を指で丹念に撫で回し、おまけとばかりに割れ目の隙間にちゅつ、とキスも見舞ってやる。  
すると聖は、どこか甘ったるい声を出しながら腰を振って痙攣した。







嬉しそうに透明な潮をびゅびゅと飛ばした。

「すごいイキっぷりするのね姫香って、初めてでいきなり潮噴きしちゃうなんて……」

「もしかして、本当は淫乱の気があるんじゃないですか……」

あまりに派手な絶頂ぶりに、美空と聖が目を丸くして赤面している。傍で見ても興奮するくらい姫香の痴態はすごかったのだ。

「フフ、これは負けてられないな。次は私たちも楽しまなくては」

奈央も相当に欲情したのか、目を輝かせて舌なめずりし、いまだ余韻に震える隆樹をマツトの上に仰向けにした。

「はあ、はあ、せ、先生、ちょっと待って、すげー出たばかりですぐには……」

「フフ、だくめ。女は火がつくと楽には止まれないの」

そう言っ自分もバスタオルを取り、豊満な裸身をあらわにして跨いでくる。口調が変化しているのは、恐らく本気モードに入ったからに違いない。

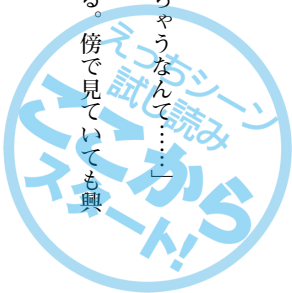
「ああ、出した直後なのにまだ硬い。さすが若いのね、んんっ、素敵い……!!」

騎乗位の体勢ですっかり腰を落とすきると、奈央の裸身が早速上下運動を開始した。

「んんっ、はああ、いい、素敵い、若いおチンポ、元気なおチンポ素敵い……♥」

「せっ、先生、もうそんなっ、うおお吸いつく、先生のおま○こお……!!」

以前みたいに焦らすこともなく、しっかりと抽送をしてくる奈央。きつと飢えていたの



だろう、その表情は見る間に蕩け、艶かしく腰をくねらせて肉棒の感触を楽しんでいく。

対する隆樹は呼吸を整えるだけでやつとだ。おま○この中は変わらさず気持ちいいが、果てたばかりで敏感すぎて追いつかないのが現状だった。

「ずるいわ先生、わたしも隆樹としたかったのにい」

それだけではなかった。まだしている最中なのに美空と聖まで肌を擦り寄せてきたのだ。「先輩、早くアタシにもおチンポください。やっぱり、本物を感じたいんです。本物の精液も、またお腹の奥で感じたい……」

「む、無理だって、休憩、せめてちよつと休憩を——ああっ……！」

残念ながら願いは聞き入れられなかった。ひとしきり楽しんだ奈央と交代し、聖もすぐに騎乗位で跨ってペニスを咥えこんできたのだ。

「ああいいっ、ぜんぜん元氣ッ……さすが先輩ですね、セクハラ大好きで、ドスケベで、いやんっ、おチンポ遅しいッ……♥」

四人で一番窮屈なおま○こが、すぐにもきゆうきゆうとリズムよく締めつけてくる。待ってましたと言わんばかりに根元から締めあげタツプリとしごく。

その感触はやはり甘美で勃起神経がびりびりしてくるが、いまだ余韻きなかの最中にあるためか快い熱感が追いついてこない。

腰を振ることもできない隆樹に、聖はバスタオルの前を開き、乳房を当てながらキスを

してきた。

「ちゅっ、くちゅ……先輩、この浮気者……美空さんにはキスしたらいいですね、アタシにはしてくれなかったのに」

「い、いや、あれは流れというか、なんとなくというか……」

「最低。そんな人には……激しくしちゃいますっ」

腰に跨がる乙女の動きが唐突に速度をあげてきた。抽送と言うよりは押しつける形でガツガツと腰を当ててくる。濡れたラビアから水音が立ち、丸いヒップがばんばんと弾け、胸板に重なる小ぶりのバストがこすりつける動きをする。

急激に高まる官能の波に隆樹は思わずうぐつ、と呻いた。その言葉を封じるようにして乙女の唇が執拗なくらい重なってくる。

「ちゅ、ちゅくちゅくつ、先輩、ふううッ、もつとして、キス、キスう……♡」

「も、もうっ、聖どいて！ 次はわたしよ、早くつたら！」

聖の情熱的なキスを見て、なぜか美空は慌てた様子で押し退ける形で自分も跨ってくる。

「隆樹はね、わたしの幼馴染で——特別な。だからエッチもキスもしてあげなくちゃ」

そう言って彼女は、まず唇を奪ってきた。それもディープなキスで、積極的に舌を伸ばし、唇をこじ開けて唾液を送りこんでくる。

「じゅるるっ、み、美空、すげーキスっ……!!」

「じゅる、あむっ……分かつてるでしょう、こんなこと、た、隆樹にしかしないって……！」  
——くちゅっ、ぬちゅるっ。

彼女は唇を触れあわせたまま、おま○こに肉棒を招き入れた。  
途端に覚えた強い官能に隆樹はくぐもった呻きを漏らす。

（気持ちいい、美空のおま○こ、実は一番刺激的かも……!）

ツブツブでいっぱいヒダの波は、相も変わらず刺激が強くて入れただけで肉棒が蕩ける。オナホと同様、いやそれ以上か。正真正銘の生の感触が腰砕けになるほど気持ちいい。しかもすごいのは、まだ動いてもいないのに粒ヒダがうねって撫でてくることだ。ねっ  
とりと纏わりつく濃密な蠕動が、いまだ麻痺した射精感をみるうちに回復させる。

「くちゅっ——じゃあ動くわね、じっとしてて隆樹——あっ、あっあっ、あんあんっ……!」  
裸身を起こした美空の腰が、ゆつくりと上下に抽送運動を開始した。

「はあ、はあ、す、すごい美空、ほんと、気持ちいいよっ……!」  
不思議なことに、素直に動きたくなくてきた。全身に溜まる疲労感はおも抜けた気配がない。腰も辛い。なのに、どこか幸せそうな彼女の表情を見ているうちに、自分もしたいという気持ちなぜか湧いてくるのだ。

「あん、あんッ、隆樹、隆樹い、ねえ指、繋いでえ、ぎゅって強くう……♥」  
「美空……はあ、はあ、く、うううっ!」

——ずんっ！ ぐちゅっぐちゅっぐちゅっぐちゅっばんばんばん……！

隆樹は菌を食いしばって懸命に腰を振った。彼女のおま○こを肉棒でずんずんと突きあげる。力はまだ十分に出ないが、両手を伸ばし、ぎゅっと指を絡め合わせる。

すると美空は、心の底から嬉しそうにクナクナと腰を躍らせた。

「あんあんッ、いいの隆樹、もつときゅってしてえ、もつと突いて、そう奥うん！ 当たるの好きなの、奥が好きなのお、隆樹のおチンポでいっぱい奥にキスされたいのおッ♥」

「はあはあ、分かっているって、美空は子宮口が好きなんだよな！ こりこりしたところッ！」

「あんそう、そこッ、きゃんん当たってるううッ♥」

子宮口をノックした途端、美空の口から一際可愛らしい嬌声が溢れ出る。奥から愛蜜もどばっと溢れ出て触れたカリをぬるりと包みこむ。

おま○こも小刻みに収縮してきて粘膜の擦れあいを濃密にする。深く吸いつくツブツブの感触に射精感がまたさらに高められる。

感覚はさつきから鋭敏なままで激しい官能に限界は目前。それでも夢中で彼女を突きあげ甘美な蜜壺を情熱タツプリにかき混ぜていく。

「あんあんあんいいいいのッいいわ隆樹いいッ！ 感じちゃう、奥好き、子宮好き、そこにキスして、おチンポキス、ああんいっぱいキスしてええッ♥」

「はあはあ美空っ、俺も気持ちいい、奥すごいっ、もうイクうっ！」

美空も激しく身悶えしながら夢中で腰を打ちつけてくる。ロケット型の爆乳を揺すり長い髪を振り乱して。幸せそうな笑みすら浮かべて迫りくる絶頂と歓喜をあらわにする。

その汗で煌く艶かしい肢体、溢れんばかりに蜜濡れたラビアに、隆樹は渾身の力で突きこみ、目いっぱい情熱を注ぎこんだ。

「おおっおお美空あああっ！」

「あっあああ〜〜〜くるくるくるのおおっ！」

——びゅびゅびゅるるる〜〜〜びしゃびしゃびしゃびしゃあっ！

よくも出せたと思うほどの大量の白濁ほとほとが逆った。カリがずつとひりひりし続け何だかおかしくなりそうだが、激しい官能は間違いなく本物で、凄まじいまでの射精感だった。

「ああああん熱い、子宮蕩けるう♥♥ これ好き、隆樹のおチンポキスう、熱い精液子宮にいっぱい入ってくるのおッ♥♥♥」

まったく同時に絶頂した美空は笑顔のままでくねくねしている。あまりに気持ちよきげな瞳には歓喜のハートマークが無数に浮かんで見えるかのように。両の手指も繋がったまま、強く握って子宮での悦びをあらわにした。

「こんなに出来たら受精しちゃいそお、ああん、一生かけて責任取らせなきや♥♥♥」

「まったく、惚れていたとはいえずっかり色ボケして。ほら搔杉、次は私にもお♥」

いい加減待ちくたびれた様子で、奈央はくねくねし続ける美空を退かせ、今度は四つん



這いになってお尻を振る。その隣に聖も並び、不満げな表情で自ら指でラビアを開く。

「美空さんにだけ出すなんて……最低。先輩、こっちにもちゃんと中出ししてくださいっ」

「……隆樹くん、わたしのおま○こにも、もつとお……」

驚いたことに、姫香まで復活して居並ぶ形で四つん這いになった。

「はあ、はあ……わ、分かったよ、みんなチンポ入れてやるから……!」

こうなつたらもう後には引けそうにない。フラフラになりつつも隆樹は覚悟を決める。

「こうなりやヤケだ、全員に中出ししてやるっ……!」

「いいぞ、その意気よお……んんんっ! はああ、おチンポきたあッ♥」

まずはと奈央のヒップを掴み精液まみれの肉棒を突きこむ。そのままぐちゅぐちゅと出入りを繰り返して蕩けた蜜壺をじつくりとかき回す。

次いで隣の聖の中にも、ずぶつと勢いよく突き入れる。休憩も兼ねて始めは焦らし、徐々に勢いを加えていくと、明らかに拗ねていた彼女の表情がどんどん歡喜に媚蕩けていく。

「はあはああん、あうんッ! す、素敵い、さすが先輩ッ、アタシの気持ちいいとこ、ちゃんと分かってくれてるう♥」

「はあはあ、当然、このざらざらんとこだよなっ……くう、締まるっ!」

——びゅびゅ〜どびゅどびゅるるるっ!

あまりに敏感になっていたせい、しばらくピストンを続けたところで再び肉棒が勢い

よくしゃくりあげてしまった。

「ああああ気持ちいいッ♥ きてるう、先輩の中出しザーメンんッ♥」

「聖ちゃん羨ましい……隆樹くうん、わたしにも中出し」

「分かってる、はあはあ、待ってて姫香ちゃんっ！」

吐精も終わらぬまま聖から引き抜くと、続けざまに姫香のおま○こにも肉棒を突きこんで中をシェイク、大きなお尻を腰で叩いて柔らかかなヒダヒダをエラで捲る。

彼女もじきにあんあんとう鳴き、自分から腰を振り始めた。隆樹もたちまち高まつてきたが、今度は奈央のむちむちヒップをがしつと掴んで乱暴にぶちこむ。

「んおっ、んほおん、いいのお、激しいッ、どくどく脈打って出たり入ったりいッ……んあつああああんきたきた濃厚ザーメンんんッ♥」

——びゅっびゅっどぶどぶどぶふうっ！

腰が落ちそうな官能の中、四度目の放出が膈内で巻き起こった。肉棒は硬く反りも十分、しかし快感が立て続けすぎて射精感が制御できない。まるで壊れた蛇口みたいに精液がどばどばと鈴口から溢れる。

それでも挫けずヒップを掴むと、姫香のおま○こを必死になって突きこする。

「やんやんあんあああんッ！ 気持ちいいです、おちんちん気持ちいいッ、ああん飛ぼう、おま○こ溶けるう、おちんちん大好きになっちゃううッ♥」



この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**

二次元ドリームノベルズ

夢幻姫姫  
S.E.N. コスプレ

とろ蜜美女めぐりの  
桃色バスツアー

日常に密着したエロス、  
リアルな舞台設定で送る  
官能小説レーベル！

リアルドリーム文庫

戦うヒロインを屈辱させてあげる  
かなり過激な  
陵辱系ライトノベル！

フリードム120%!?  
ジャンルにこだわらない  
ドキドキラブ！

呪詛喰らい師

あとみっく文庫

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ

# あなたはどのタイプ？

二次元ぷち文庫

あの人気作品の  
外伝作品もあり！  
電子書籍しつこめなエッチノベル！

姫騎士 クラズメイト!

ビギニングノベルズ

小説家になろうの男性向けサイト  
から書籍化！

二次元ドリーム文庫

ドキドキラブな  
ハーレム系  
ライトノベル！